

大学名	京都精華大学
事業名	アフリカとインドからの戦略的な留学生受入れと人材育成体制の整備
事業概要及び達成目標	<p>○ 事業概要</p> <p>本学の中長期国際化方針の下、留学生の受け入れを積極的に推進していく中で、日本ではまだ実績の少ないアフリカ諸国とインドをターゲットにした政策を実施する。具体的には、1) 現地における留学生誘致と渡航前準備の支援活動から、2) 本学における質の高い短期/長期の受入れプログラムの導入、3) その後のインターンシップや企業の就職・定住までに及ぶトータルな受入れシステムの構築を実現する。留学生と国内学生に対するグローバル・シチズンシップの育成を通して、本学教育の活性化や地域への貢献に資するものである。</p> <p>○ 令和5年度の取組概要</p> <p>(1) 事業内容</p> <p>本補助金事業も最終年度を迎え、総仕上げとしての結果を出すべき1年であった。コロナ禍による渡航制限も解除され、これまでの停滞を挽回するために現地に足を運ぶことで前進したことも多くあった。アフリカに関しては設置したセネガルのダカール事務所は現地コーディネートをを行う業務委託会社の経営都合により大きく縮小したが、日本国内において誘致につながる活動を展開した。本学アフリカ・アジア現代文化研究センターが留学生誘致推進の目的もあり、「グローバル化の中の日本語教育」として2023年11月から2024年2月にかけて5回に及ぶ公開講座を開き、「アフリカにおける日本語教育」の在り方等を論じた。また京都国際マンガミュージアムと本学国際マンガ研究センターの共催で「アフリカ・マンガ展」とその関連イベントを開催した。</p> <p>一方で、インドからの留学生誘致に関しては、本学教職員がチームを組み、ムンバイにあるインド工科大学(IIT, Bombay)やプネーにあるシュリ・バラジ大学を訪問し、大学間の連携・協働を深めるための交渉を続けた。また同時に、インド・ニューデリー市にある国際交流基金の所長、東京大学インド事務所のシニアマネージャーとは相談のための連絡を取り続けた。今年度のインド訪問では在インド日本大使館や現地日本語学校等をも訪ねた。</p> <p>(2) 事業成果</p> <p>2023年度の事業としては、以下に挙げるさまざまな取り組みを通じた多角的なアプローチにより一定の成果をあげることができた。4年間の仕上げとして当初計画をすべて完結することはできなかったが、将来に向</p>

けた継続的で発展的な結果を出すことができた。

2023年度に本学アフリカ・アジア現代文化研究センターが開催した公開講座「グローバル化の中の日本語教育」では、全5回の講座で計104名が参加した。本学が運営する京都国際マンガミュージアムで本学教員が中心になって開催した「アフリカ・マンガ展」では200名が関連イベントに参画し、アフリカ研究やマンガ研究の人的ネットワークを構築することができた。

一方で、インドとの関係強化に結び付けるための諸施策も積極的に実施することができた。とくに2022年度から複数回訪問しているインド工科大学ボンベイ校(IIT, Bombay)とは学生や教職員交換のさらなる展開、本学が構想しているIT系分野の教育プログラム設置への協力、共同で実施するデザイン・コンペ企画に関して具体的な進展が見られた。本学大学院への進学を希望しているIITのアニメーション専攻の学生たちを対象に説明会も開催した。一方、プネーにあるシュリ・バラジ大学とは新規に相互協力一般協定を締結した。インドからの留学生誘致をめぐっては在インド日本大使館で国費研究留学生制度の担当者と、またインド在住のチベット人学生の受け入れに関してはダライ・ラマ法王代表部事務所と長時間にわたり施策の可能性を議論することができた。本補助金事業申請にあたり、当初立てた4年間計画の達成目標には試行錯誤の取り組みの中で困難なことも多く、まだ及ばない点が多々あるが、留学生誘致に向けた将来への基盤づくりという点においては一定の成果を上げることができたと考えている。

○ 達成目標（※上段が当初目標値、下段が実績値）

指標	2年度	3年度	4年度	5年度	6年度
外国人留学生数	920	1,000	1,200	1,400	1,600
	928	1,070	1,171	1,248	-
アフリカ・インドからの受入れ学生数	4	5	6	7	8
	2	2	1	2	-
アフリカ・インド提携校数	4	5	6	7	8
	4	8	8	9	-
インターンシップ提携企業数	0	3	10	15	20
	0	0	0	0	-

リンク先

URL : <https://www.kyoto-seika.ac.jp/> (京都精華大学ホームページ)